

メ ディエーション、相互文化性、 そして市民性教育

：日本語教育における意義と可能性

2013年2月23日(土)

国際交流基金ロンドン日本文化センター
英国日本語教育学会(BATJ)共催

細川英雄(早稲田大学大学院日本語教育研究科)

はじめに

- それぞれの分野・領域と言語教育としての日本語教育の関係と連携
 - 日本の言語・文化・社会に関心を持つ人をどう受け入れるかー動機・日本語教育から各分野・領域へ
 - 両者を結ぶものとしての教育実践とその言語活動主体とあり方の再検討ー歴史・社会的状況を踏まえつつ
-

はじめに

□ メディエーション(仲介・調整)

さまざまな「結び・つなぎ」の役割の認識

□ 相互文化性

インターカルチャーとは、個人一人一人の考え方や価値観の相互交流のこと

□ 市民性教育

個人が他者との協働においてどのような社会を形成するのかを考えるようになる教育

発表の構成

- 日本語教育と分野・領域の現状－その分断化の意味するもの
 - 日本語教育の有する問題性－コミュニケーション能力育成という技術主義
 - 各分野・領域とことばの教育－研究・教育と「私」
 - 言語活動主体の充実とは何か－テーマを発見する「私」(細川2012a・b); 私の活動実践例から
 - 「ことばの市民」としての言語活動主体－日本語教育と各分野・領域を結ぶもの
-

日本語教育と各分野・領域の現状

ーその分断化の意味するもの

- 日本語教育と各分野・領域の関係(19世紀半ばから1970年代後半・80年代にかけて)
 - 日本語学習者の増大ー目的の大衆化と日本研究希望の減少ー教師と学習者の乖離
 - コミュニケーション能力育成ー技術主義の発達／日本語教育における準備主義台頭
 - 訳読法に慣れた関係者ー荷の重い、余技としての日本語教育ー教育と研究の分業化
-

日本語教育の有する問題性

ーコミュニケーション能力育成という技術主義

- 実社会に役立つ「コミュニケーション能力育成」主義ー必要な言語知識(語彙・文型)と仮想場面のタスク
 - 技術主義は活動内容を拒否ー技術を専門性とするー「お手伝い」発想と役割固定化
 - 固定的な知識や技能の実体化の限界ー動態的な問い直し姿勢とプロセスそれ自体に着目ー言語教育としての専門性の意味
-

各分野・領域とことばの教育－研究・教育と「私」の問題

- 関係者自身にとっての問題意識「なぜ私はこの研究をするのか」と教育のあり方
 - 研究と教育の対立－対象の分析・解釈または位置づけ⇒その成果を学生・学習者に与える
 - 教育・研究－言語活動を通して学生・学習者そして教師一人一人のテーマを探求すること
 - 教師も学生・学習者も一個の言語活動主体としてのあり方とその可能性が問われる
-

言語活動主体の充実とは何かーテーマを発見する「私」(細川2012a・b)

- 言語活動によってさまざまな思考と表現のあり方を学ぶ
 - 他者の存在を受け止め、多様な価値観の錯綜するコミュニティの複雑性を理解する
 - 複数コミュニティのありようの中で自己アイデンティティを確認する
-

私の活動実践例から

- 「考えるための日本語—個人と社会を結ぶ」(早稲田大学2010年度春学期・全学オープン教育科目)
 - 学部生6名(日本人3、留学生3)・大学院生2名(留学生2)・別科生1名(留学生1)／実習生6名(日本人4、留学生2)＋TA1名(博士・留学生1)
 - 合計15名(5人×3グループの活動)
-

参加者V(留学生・中国 大学院生・国際関係論専攻・2012年9月博士学位取得)の事例

- 個人と社会を結ぶことを考えるために何ができるかを検討する教育実践活動
 - 5名で「悶々新聞」を作る
 - 日本語能力への不安
 - 活動実践と自分の研究課題との共通性
 - 自分のしたいこと、できることを模索—テーマの発見
-

このクラスの一番の楽しみは、出すこと

私にとって、このクラスの一番の楽しみは、出すこと、そして、みんなの反応を待っていることだ。私は、普段、自分の考えを遠慮なく、どんどん出す人ではない。

もし、すべてを出せば、どうなるかな。このクラスで、実験すれば、多分大丈夫だ。…出すことによって、このクラスに来ることが楽しみになる。宿題が多いけど、楽しい。こういう出す、反応を見て、さらに出すというプロセスから、わかることは、実は、誰でも、出したいことだ。

冷やしラーメンを食べる感じ

みんな出すことによって、私も出す。私が出すことによって、みんなも出す。こういう経験がほんとに冷やしラーメンを食べる感じがする。

私たち、新聞で語っている、社会とのつながりの形と方法を、実は、グループ内で、すでに実行している。つまり、私たち語るものは、インタビューからもらうものだしグループからもらうものでもある。こうやって、自ら経験して、社会について、ほかの人とのつながりに関する思いが深くなる。

このクラスの目的は日本語じゃない

日本語がこのクラスの目的じゃないけど、ひとつ気がついたことは、日本語に気にしなくなることだ。文法が正しいかどうか、そういうことを気にしなくなる。

向こうの話を半分しかわからないときに、ぜんぜんあせていない。めちゃくちゃな日本語を出しても、ぜんぜん恥ずかしくない。もう、どうでもいい、とにかく相手をわかせるような感じで、やっている。これは、言葉の勉強にいいかもしれない。

「自分は外国人である」と受け止めること

最初は自分の日本語を心配した。うまく交流ができないならどうしよう。クラスメートはどのように自分を評価するのか.....色々な問題を悩んでいた。

授業を通して、もう成長したと思う。外国人として、一番大事なのは「自分は外国人である」と受け止めること。ネイティブレベルまで外国語を使えるのはいいであるが、外国人として不自然的に言葉遣いになってしまっても恥ずかしいことにならない。

。

参加者Vのレポート

どうして、どうやって、個人と社会を結ぶか
— 二人の在日中国人との対話から思うこと

中国にいたとき、もし、この社会とつながっているかと聞かれたら、笑う彼知れない。なぜならば、生まれるときから、ずっとこの社会に住んでいて、つながっていないなんて、ありえないわ。どうして、どうやって、この社会と結ぶかと聞かれたら、ほんとに答えられない。わからないから、しかも、思ったこともない。…このきじは、ざいにち二人の中国人のインタビューをめぐて書いたもの。目的は、異国にいる経験から、社会と結ぶ重要さと方法を見ることである。

人は、どうやって所属感が生み出せるか？

人は、社会との結びから、所属感を求めるのだとしたら、どうやって、所属感が生み出せるか？Aさんは、自分の息子がもう日本化になるといったとき、さびしい顔をした。息子は、日本で育てたから、日本人と同じ認識を持って、自然的に日本社会に所属感が持つようになる。AさんとBさんは日本語が上手だけど、育て中国で、長年日本にいても、完全に日本人と同じになんしきを持つのが難しい。自分は中国人としてのエゴがあって、その部分をわかってくれなくて、自ら押さえて、なかなか所属感を生まれないじゃないかな。

同じ認識を持たない場合は、 どうすればいいか。

同じな認識が所属感を生まれるために、とても必要だとしたら、同じ認識を持たない場合は、どうすればいいか。努力して、ほかの人と同じ認識をもつようにする？それとも、ほかの人の認識を無視して、自分の世界に閉じ込む？

わたしは、大学三年のとき、Internshipで、半年ぐらい、シンガポールに住んでいた。とても、つらかった。…仕事は全部英語で、コンピュータを使うのは日常茶飯だし、会社に入ったとき、いろいろ間違いをやって、同じグループの人に迷惑をかけた。

ほんとは、つながっていない感じ・・・。

文化や知識やちがうから、よく、同僚たちの会話に乗れなくて、仕事以外の交流もうまういかなかった。時々、自分が無視される、ばがだと思われる感じがした。ほかのひとにみとめられるために、いろいろ勉強して、みんなの興味の持つことについて調べて、だんだんグループに入れるようになった。きもちは、まえより楽しかったけど、さびしさがなくなることがない。表面的に、つながっているみだいだけど、ほんとは、つながっていない感じがした。

出すのは、問題を解決の第一歩

今で、なぜそう感じたかと考えると、みんなの付き合い合った私は、同じ知識を持つ私、違う知識を持つ私を、どこかで隠さなければならなかったからだ。隠すのはやっぱり圧力をかけて、気持ちがよくなれないね。じゃ、すべて出せば、どうかな。かならず、結べる？

卒業してから、ずっと外国人と一緒に働いて、ひとつ学んだことは、みんな大体同じだから、遠慮なく、全部出したほうが、自分も楽、向こうも安心だということである。黙ったりとか、裏につぶやいたりとか、何も解決できない。出すのは、問題を解決の第一歩である。

意見を出して、だんだん元気になる

悶悶グループメンバーたちは、社会と個人の結びについて、自分なりの考えがある。最初に、みんな自分の意見を出さないとき、ほんとに悶悶した。意見を出すことによって、だんだん、元気になって、仲間意識を持つようになる。けど、違いがなくなるというわけではない。ちょっと変わるかもしれないけど、まだそこにいる。みんな、違いをよそにして、一致することを見つける。

自分の居場所をわかって、生活ができる

この作業で、一番重要なのも、出すことだと感じる。したがって、同じな認識を持つかどうかより、出すほうが社会とつなぐためにもっと肝心だといえるかも。簡単に言えば、個人は出すことによって、ほかの人と理解しあって、つながって、自分の居場所をわかって、感心して、生活ができる。

参加者Vのテーマへ 中国の大学の国際化と私

私の研究テーマは中国の大学の国際化に関する。世界の大学の全体を社会だとすれば、中国の大学は、この社会の個人である。国際化のプロセスは、ほかの大学につながるプロセスだと考えられる。国際化の手段として、自分の学生と教師を外に送ったりとか、外国の学生と教師を受けたりとか、外で学校を立てたりとか、外の教科書を輸入したりとか、このようなすべてを個人としての中国大学の出すことだと考えられる。

私の居場所はどこか

その結果として、中国の大学は世界の大学のことをもっとわかるようになって、お互いの違いと差がよく理解する上に、行動して、自分の居場所を磨いて、ほかの大学と共生する。ほかの大学も、中国大学の出すことによって、自分も出すようになって、同じな結果を得る。実際には、国際の目的がとても複雑で、こう簡単に語られないが、形は大体同じで、出すことも同じ重要だと思う。これから、どうやって出すか、私の居場所はどこかについて考えたいと思う。

皆さん、ようやくできた。

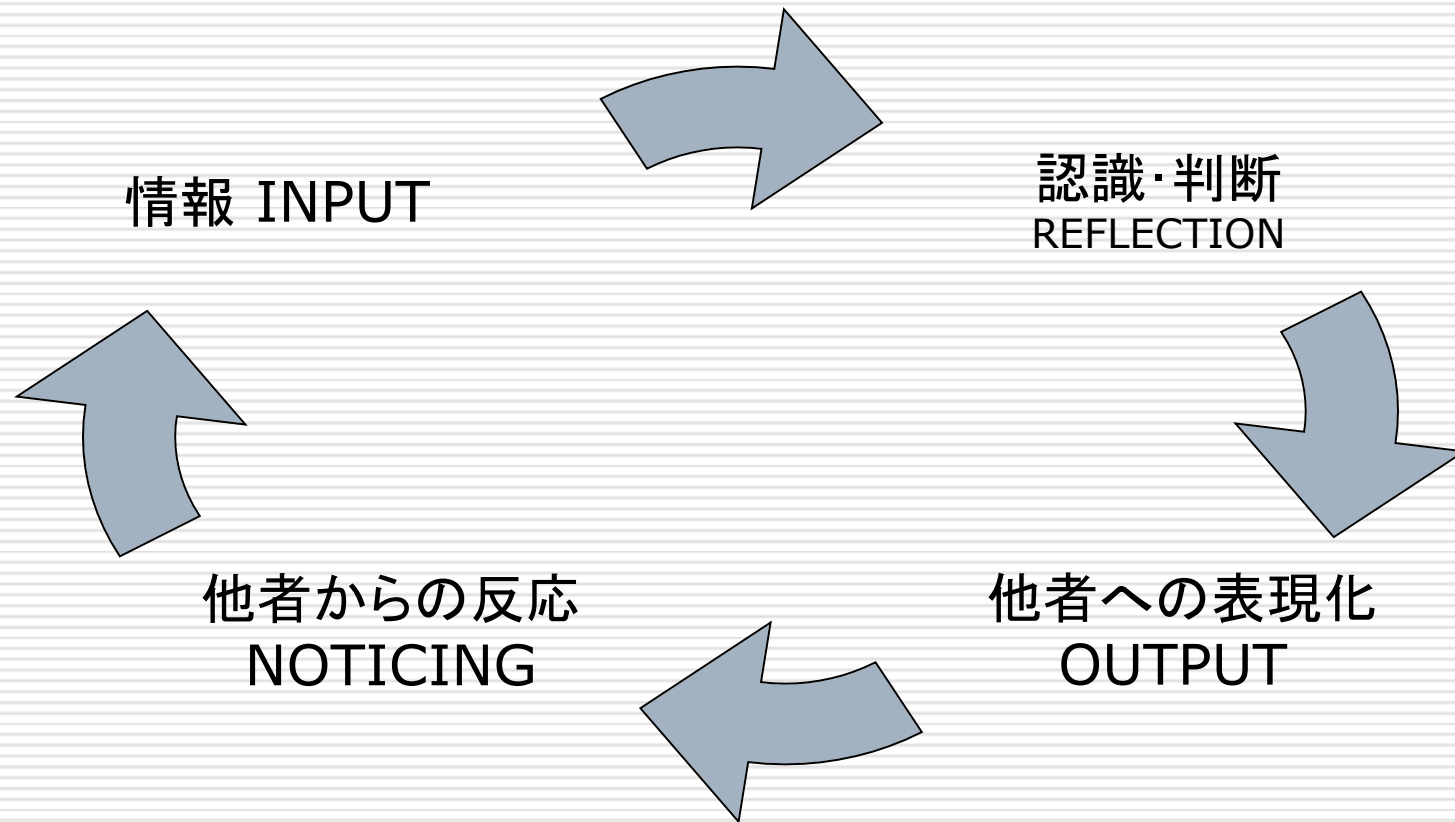
- ・できた From: B [2010/06/27 23:26]
 - 皆さん、ようやくできた。最後に、何を書いているか、もうわからなくなりました。泣く。後、30分、完成していない人、がんばれ。先生、私の発言を読んでいただいて、光栄だとおもいます。笑
 - 自分の研究テーマにつなぎたかったけど、やっぱり、能力がたりなくて、最後のとき、頭がめちゃくちゃになって、ちゃんとまとめなかったと思います。はずかしいです。
-

Vにとってテーマ発見とは何だったのか

- 言語活動によってさまざまな思考と表現のあり方を学ぶ
 - 他者の存在を受け止め、多様な価値観の交錯するコミュニティの複雑性を理解する
 - 複数コミュニティのありようの中で自己アイデンティティを確認する
-

Vは、どのようにしてテーマを発見したか

(細川2012a)



「ことばの市民」としての言語活動主体

- 教師・学生・学習者という行為者の活動を結ぶものとしての教育実践—それぞれのアイデンティティを問う意味
 - 各分野・領域—前提としての「私」の問題意識を問う活動からはじめる
 - 日本語教育—日本語習得を目的としない言語活動と活性化—テーマのある議論
 - 国語と日本語という境界の解体
-

「ことばの市民」としての言語活動主体

- テーマのある議論—自分の問題関心から問題意識へ
 - 母語話者・非母語話者という区別を超える活動—統合的な学習／教育をめざす
 - 行為者が、一個の言語活動主体として、それぞれの社会をどのように構成できるのか
 - 「ことばの市民」(細川2012b)という概念へ
-

メディアーション、相互文化性、 そして市民性教育

: 日本語教育における意義と可能性

- ご意見、ご感想、ご質問をお待ちします。
- メールマガジン「ルビュ言語文化教育」
- 毎週金曜日発行(購読無料)
- <http://www.gbki.org/>

担当: 細川英雄

早稲田大学大学院日本語教育研究科
